

令和 2 年 5 月 27 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04519

研究課題名(和文)戦後開拓地における学校を基盤とした地域文化の形成過程に関する歴史的研究

研究課題名(英文)A Historical Study on the Formation Process of Community Culture based on School in Post-war Reclamation

研究代表者

高瀬 雅弘 (Takase, Masahiro)

弘前大学・教育学部・教授

研究者番号：20447113

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後開拓地という「新しい地域社会」におけるコミュニティや文化の形成と、学校の設立・展開の過程との相互関係を捉え、ローカルなレベルでの学校化がどのように受容・利用されたのかを分析したものである。

ここから明らかになったのは、(1)学校教育に対する高い関心と、それに支えられた学校と地域の教育課題の共有、(2)多様な背景をもつ戦後開拓地の人びとにとっての「心のよりどころ」としての学校の意味、(3)へき地校としての普遍的課題と戦後開拓地固有の課題とが重なる状況のもとで培われた、「地域に根ざした」教育課題への取り組みの位相、であり、これらによって形作られた学校を基盤とした地域文化の形である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来の地域教育史・地域社会史研究において十分に検討されてこなかった戦後開拓地を対象とし、学校づくりと新たな地域づくりとが同時並行的に展開する過程を分析することで、「学校と地域社会」研究における新たな視座を開拓することを目指したものである。

「学校と地域社会」の関係に対する問いは、人口減少社会における教育生活環境が果たす役割や、学校を核とした地域づくりといった現代的な課題へと連なっている。地方において学校統廃合が進められる状況のもと、本研究は、学校を通して構築される「新しい地縁」をどう意味づけるのかという課題に対して、歴史的な教育・被教育経験から現代への示唆を得ようとしたものである。

研究成果の概要(英文)： This research examined how schooling was accepted and evaluated at the local level, focusing on the interrelationship between the formation of community and culture and the process of school establishment and development in the Post-war Reclamation as "new community".

A case study on the Post-war Reclamation has showed a type of community culture based on school; (1) Demand for school education and Sharing educational issues between school (2)Significance of school as "a Foundation" for people with various backgrounds (3)Aspects of practices for "locally rooted" educational issues which was cultivated in a situation where universal issues about a rural school and issues unique to a school in Post-war Reclamation overlap.

研究分野：社会学

キーワード：戦後開拓 学校 地域社会 へき地教育 教師 共同性 生活綴方

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

戦後日本の地域社会の変容が歴史研究の対象となるなかで、学校と地域が結び結ぶ関係構造の転換にも関心が払われるようになってきた(橋本他編(2011)、木村(2015))。こうした地域教育史、あるいは学校と地域の関係史研究は、以下のような三つの視点から蓄積されてきた。

第一は、生活綴方などの教育運動の流れを汲みつつ、時代状況と向き合う形で構築された教育実践に注目するものである。一例として、木村(2013)は、東井義雄の地域と学校を繋ぐ教育実践から、学校化社会への移行の過程を捉えている。

第二に、第一の視点と関連して、地方での「学校から職業社会への移行」に注目した研究も蓄積されている。集団就職の実態を地方から捉えた橋本(2011)の研究は、学校を媒介に地域を出入ることの意味を当事者に問うものとなっている。

第三に、地域による学校の設立・維持過程に関する研究がある。山間部に設置された高校分校の成立と展開をたどる小林(2011)は、地元定着指導実践を例に学校から地域社会への働きかけの位相を明らかにしている。

これらの研究はそれぞれ重要な知見を提示しているものの、対象の特性から依然として残されている次のような課題がある。

まず、既存の研究が対象とするのは、既成のあるいは所与の地域であり、そのため学校が地域社会を形成していく過程については分析されていない。次に、学校の設立・維持の基盤となる地域社会の構造について、経済史料などに基づいた把握がなされていない。

地域社会史研究の領域においては、近年戦後開拓地の成立と展開に関する研究が進められている。社会学の視点から戦後開拓地のコミュニティの特性について分析した蘭(1988)は、満州開拓からの引き揚げ者が形成した開拓地の「共同性」に注目している。また、オーラルヒストリーに基づき長野県下伊那地方の戦後開拓地の歴史を包括的にまとめた森(2013)は、その生活を丹念にたどることで、地域社会の成立過程を捉えている。岡山県の開拓集落を対象とした大竹(2014)は、地域の共同性を農業面の活動や地域活動に求めている。

こうした戦後開拓地に関する先行研究においては、第一に、その多くが満州開拓との連続性に立脚した地域を対象としており、多様な属性の、いわば「寄せ集め」の人びとからなる戦後開拓地の地域形成には関心が払われていない。第二に、視点や問題関心の相違から、学校や教育に対する注目も十分にはなされていない。

青森県と岩手県の戦後開拓地をフィールドに、地域社会の形成過程に関する調査研究を行った高瀬(2014・2015)は、地縁や血縁をもたない入植者たちからなる戦後開拓地における対立や葛藤の位相の存在と、それらが農業経営をめぐる淘汰や、第一世代から第二世代への移行によって小さくなる、あるいは解消されていく過程を明らかにした。一連の調査からは、第二世代における共通体験のもつ意味と、その「場」としての地域における学校の存在の重要性が示唆された。しかし具体的な学校体験や教育実践の内容についてはほとんど明らかにできておらず、地域社会の形成過程の分析のなかに学校を本格的に位置づけるという課題は残されたままになっている。そこで地域に伏在する教育・被教育経験と歴史資料を掘り起こし、日本の地域と学校をめぐるマクロな社会変動の構図とミクロな蓄積とを架橋し、地域教育史と地域社会史とを接続する研究を指向するに至った。

2. 研究の目的

本研究は、従来の地域教育史・地域社会史研究において十分に検討されてこなかった、戦後開拓地における地域社会や文化の形成と、学校の設立・展開の過程との相互関係を捉え、ローカルなレベルでの学校化がどのように受容・利用されたのかを明らかにしようとする試みである。

具体的には、戦後復興期から高度経済成長期にかけて青森県鱒ヶ沢町山田野開拓地と同地区に存在した旧鳴沢小学校山田野分校(1954年~2002年)・旧東鳴沢中学校(1947年~1960年)を対象に、「地域社会が学校を作っていく過程」と「学校が地域社会を作っていく過程」の相互関係を分析する。地縁や血縁をもたない人びとからなる戦後開拓地は、占領期改革のなかで再編されたムラとも異なる経緯のもとに成立し、そこでは地域文化もまた所与のものではない。

自然村的な原理に基づいた「農業的社会」=農政上の「一般農村」とは異なる存立基盤をもつ「開拓村」=戦後開拓地において、人びとのアイデンティティや共同性といった地域文化がいかに形成され、それらが世代間で継承される過程に学校がどのように関わっていたのかを明らかにすることが本研究の課題である。

そこで以下のような3つの問いを設定し、分析を行う。

(1)地域の人びとは学校の設立にどのような思いを込め、関わっていったのか

(2)地域の人びとは学校をどのような「場」として位置づけ、利用したのか

(3)学校の教師、児童・生徒、地域の人びとは学校を通して地域社会の課題をどのように受け止め、それぞれの立場からどのように向き合っていたのか

そのうえで、多様な属性の人びとからなる戦後開拓地において、学校の存在が地域社会や地域文化の形成や維持にとっていかなる意味をもっていたのかを明らかにする。本研究は、戦後日本の学校と地域社会の相互規定性のあり方を、ミクロな視点から解明し、マクロな社会変動の構図のなかに位置づけることを目指すものである。

【引用・参考文献】

- ・ 蘭信三, 1988, 「満州開拓団を母体とする戦後開拓集落における「共同性」」『ソシオロジ』33-1.
- ・ 大竹晴佳, 2014, 「戦後開拓集落における共同性の現状」『新見公立短期大学紀要』35.
- ・ 木村元, 2013, 「戦後教育と地域社会」安田常雄編『戦後日本社会の歴史』第二巻, 岩波書店.
- ・ 木村元, 2015, 『学校の戦後史』岩波書店.
- ・ 小林千枝子, 2011, 「地域の学校づくり」橋本紀子他編『青年の社会的自立と教育』大月書店.
- ・ 高瀬雅弘編, 2014, 『山田野』弘前大学出版会.
- ・ 高瀬雅弘, 2015, 「戦後開拓地のライフヒストリー(4)」『弘前大学教育学部紀要』113.
- ・ 中央教育審議会, 2015, 「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」中央教育審議会(答申).
- ・ 野添憲治, 1976, 『開拓農民の記録』NHK ブックス.
- ・ 橋本紀子, 2011, 「農村社会における 学校から職業への移行」橋本紀子他編『青年の社会的自立と教育』大月書店.
- ・ 土方苑子, 1994, 『近代日本の学校と地域社会』東京大学出版会.
- ・ 森武磨編, 2013, 『戦後開拓 長野県下伊那郡増野原』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科.

3. 研究の方法

(1) 先行研究の検討

戦後教育改革期から戦後高度成長期における青森県の教育の展開をまとめた基礎的な先行研究(青森県教育委員会, 1970-74, 『青森県教育史』など)に基づき、問題意識の精緻化を図った。また、教育史研究、なかでもへき地教育に関する先行研究、地域教育史に関する先行研究を網羅的に収集し、批判的に検討した。加えて農村社会研究におけるコミュニティ分析の成果をふまえ、戦後開拓地と一般農村との共通点、ならびに相違点を整理し、対象地域および学校の特徴と位置づけを明確にした。

(2) 基本的資料の収集と整理

研究の前提となる社会構造・変動を把握するために、1950~60年代を対象として青森県内の図書館・資料館が所蔵する以下のような基本的資料の収集と整理を行った。

全国的なレベルでの戦後開拓地における学校設立に関する政策文書

青森県の教育統計

青森県の農業統計(とくに開拓地の営農状況に関する調査資料)

農村教育に関する書籍

戦後開拓地を取り上げた新聞記事やルポルタージュ

また、これらに加えて青森県鰺ヶ沢町旧鳴沢小学校山田野分校・旧東鳴沢中学校の設立に至る請願・通達書類等、ならびに青森県における分校設置に関する政策や規程等に関する文書資料を収集し、リスト化を行った。同時代的な分校に関わる社会的な問題意識に関しては、国立国会図書館が所蔵している教育雑誌資料を収集し、分類・整理を行った。

(3) 学校所蔵資料の調査

旧山田野分校資料

現在は山田野集会所として利用されている、旧山田野分校校舎に所蔵されている学校資料(文書資料・文集・記念誌など)および山田野開拓農協に関する地域資料(書類群)の状況把握とリスト化、写真撮影によるデジタルデータ化を実施した。

小学校資料調査

鰺ヶ沢町立西海小学校および舞戸小学校が所蔵する学校資料(文書資料・文集・記念誌など)の状況把握と整理・分類作業を行った。これらは当該校のみならず、両校に統合された学校のものを含む資料群である。

中学校資料調査

旧陸軍演習場兵舎の建物を活用して開校した旧東鳴沢中学校関連資料(鰺ヶ沢町教育委員会が管理)について、資料を保管する鰺ヶ沢町立鰺ヶ沢中学校において資料調査を実施し、その一部はリスト化および写真撮影によるデジタルデータ化を行った。なお東鳴沢中学校については、比較的早い時期(1960年)に統合が行われていることを鑑み、統合先の学校沿革史等の資料についても調査を実施し、地域社会と学校の関わり、生徒の卒業後の進路動向といった点についての把握を行った。

(4) インタビュー調査

元学校教員調査

旧山田野分校および旧東鳴沢中学校の元教員5名を対象とした聞き取り調査を実施した。ここでは他の学校と比較した際の山田野地区に存在した学校の特性、地域社会と学校の関わり方、教師としての職業経歴における開拓地での勤務経験の意味づけ、山田野地区を含む西津軽郡の教育文化の特徴といった点についてインタビューを行った。対象者へのアクセスにあたっては、鰺ヶ沢町教育委員会の協力を得た。

また、山田野地区と同じく西津軽郡の戦後開拓地のひとつである深浦町長慶平地区について、元教員1名を対象に聞き取り調査を行い、山田野地区の特性を把握するための比較対象とした。

卒業生・地区住民調査

旧山田野分校の学区(学区会。現在は地区町会に移行している)において、地区町会の協力のもと、現在も同地区内に在住する開拓第一世代、第二世代、第三世代の人びと(全7名)を対象に、回顧的な学校体験の意味づけ、他の地区の児童生徒との関わり、戦後開拓地という地域の歴史に対する認識といった点についてインタビュー調査を実施した。

(5) データ分析

収集した文献、資料およびインタビューデータをもとに、戦後開拓地における地域文化の形成に対して学校が果たした役割について分析を行った。この作業においては、インタビュー調査対象者の世代構成に基づき、仮説的な時期区分を行い、マクロな社会変動と学校・地域社会の動きとを対置させ、両者の関係構造を読み解いた。

そのうえで、これまでの地域教育史研究が対象としていた農村社会とは異なった存立構造をもつ戦後開拓地という、比較的「新しい」地域社会にとって、学校はいかなる「場」として経験されたのかについての分析を行った。その際には戦後日本社会の変動過程における戦後開拓地の学校の固有性と、へき地の学校としての一般性の双方に留意しつつ考察を行った。

これらの内容は、以下のような形に大きくまとめることができる。

学校の設立・展開過程における地域社会との関係性

人びとの学校に対する意味づけと利用の様態

戦後開拓地における教育課題に対応した実践とそれが有する歴史的意味

4. 研究成果

本研究は、文書資料とインタビュー調査を用いて、戦後日本の社会変動のなかで、地縁や血縁による基礎をもたない戦後開拓地の地域社会や地域文化の形成と展開に学校が果たした役割を明らかにしようとしたものである。

具体的には、以下のような点が明らかになった。

(1) 地域との協働による学校づくり

本研究の対象である山田野開拓地においては、小学校分校設立の過程に見られるように、地域社会における学校教育に対する強い関心が認められ、それは分校が開校となる2000年代初頭まで維持された。そこに至るまでの間には、三部複式学級の解消といった課題が設定され、加えて教師の側から地域の人びとへの学校行事や運営への参画が促されたことによって、学校と地域社会との紐帯は、より強固なものとなっていった。このことは山田野開拓地における学校のきわだった特徴として捉えることができる。

新たに設置された中学校は、新たな地域社会を形成・維持するための働きかけを行う場でもあった。学校行事は、生徒たちだけでなく、地域の大人たちをも巻き込み、地域の行事となっていた。こうした機能は小学校分校においても担われたものであったが、小学校がひとつの地区や集落を単位としていた(小規模校の多い西津軽郡ではその傾向が強い)のに対し、複数の集落を学区とする中学校は、これらを結び、既成の集落を越えての交流の機会を生み出した。

独立校舎を有する中学校の設立過程においては、既存の集落とともに開拓地の人びとが運動の担い手となった。このことは、学校教育に対する高い関心の存在とともに、戦後開拓地が他の集落をときにリードする存在であったことも窺わせる。

(2) 地域統合の象徴としての学校

戦後開拓地においては、地域社会は「選択的」共同体という形で成立した。なかでも多様な属性の人びとからなる戦後開拓地においては、その傾向はより顕著になった。したがって、そこでの共同性や人びとのつながりは、所与のものとしてあるのではない。ゆえに「選択的」共同体としての戦後開拓地は、共有するシンボルを必要とした。そうしたシンボルのなかでもひととき大きな存在となったのが学校であったと考えられる。

小学校分校である山田野分校において、学校が「心のよりどころ」となることを看取した教師の実践は、そのシンボルとしての存在をそれまで以上に大きなものとした。

一方、中学校を対象とした分析からは、開拓地の入植者たちが、既存集落の人びとは異なった学校に対する理解と意味づけをもっていた可能性が示唆された。農家以外に出自をもつ人びとが多く含まれていた入植者たちは、教育に対する願望を強くもち、子どもの将来にとって学校が重要な存在であることを強く意識していた。実際に教師たちの回想からは、子どもたちの学力も総じて高かったことが示唆された。そして、子どもたち自身もまた、農業を中心とした他の集落とは異なり、他出することを「宿命」として捉えていた。入植者の子どもたちは、やがて西津軽郡をはじめとした青森県、さらには東北地方全体を覆う集団就職による青少年の都市への大規模な移動の先駆けとでもいふべき存在であった。

(3) 戦後開拓地における教育課題と実践の位相

戦後開拓地における小学校分校は、へき地校としての普遍的な教育課題、端的には三部複式と

いった、授業を実施するうえでの環境の劣悪さに直面していた。そうした条件のもと、具体的な指導法も確立していないなかで、教師たちは試行錯誤を重ねていった。このような教育課題を学校と地域社会とが共有することで、両者の相互作用や相互関係が深まっていったことが認められた。

中学校での教育実践においては、小学校と同様に「生活」に寄り添うことが求められた。この「生活」という主題は、西津軽郡の地域特性と、戦前からの生活綴方実践における課題を引き継ぐものであった。そこに新たな「生活」を模索しようとする戦後開拓地の課題が折り重なっていた。ここから見えてくるのは、新しい制度のもとでの中学校がもっていた、戦前からの教育課題と新たな教育課題の双方に向き合うという、過渡的性格である。

併せて、本研究において捉えた学校と地域社会の関係の展開には、教師たちの自己形成の過程が埋め込まれている。それは教師の熱意が学校を媒介に地域社会を変えていくという一方向的なプロセスではなく、人びとのつながりの強さが赴任した教師に驚きを与え、また課題解決や学校経営に積極的に参画しようとする地域社会によって、新たな教育観を獲得するという、双方向的なものである。

戦後開拓地は、その成立の経緯から、「歴史なき地域」であった。しかし教師たちの取り組みは、そこにすでにある「歴史」を読み解き、綴っていこうとすることで、地域の「歴史」を創出しようとするものであった。そして実際に、閉校した後も現在も地域の集会所として存続している旧分校や旧中学校校舎を拠りどころとして、そこに関わった人びとの学校の記憶は今日まで語り継がれている。このような学校のありように、戦後開拓地における、学校を基盤とした地域文化形成のひとつの形を見ることができる。

そのうえで、今後に残された課題としては次のようなものがある。

ひとつは、本研究で捉えられた戦後開拓地における学校と地域社会の関係構造を、より広い地域的文脈、たとえば西津軽郡といった地域の枠組みに置いたときに、それがどのような意味をもつのか、ということである。もうひとつは、戦後開拓地の学校で展開された教師たちの実践の背後にある地域の教育文化の価値づけを行うことである。

これらの点については、今後フィールド調査を通じてより深く分析していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 高瀬 雅弘	4. 巻 122
2. 論文標題 戦後開拓地における学校と地域社会(2) 教師たちから見た1950年代の新制中学校と開拓地	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 弘前大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高瀬雅弘	4. 巻 120
2. 論文標題 戦後開拓地における学校と地域社会(1) 1970年代の小学校分校における教育実践と地域社会の相互作用に関する事例研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 弘前大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 19-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高瀬 雅弘	4. 巻 118
2. 論文標題 中等社会科教育と社会調査 歴史・視座・実践	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 弘前大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 19-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本教育社会学会編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 320
3. 書名 教育社会学のフロンティア 1	

〔産業財産権〕

[その他]

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	木村 元 (Kimura Hajime) (60225050)	一橋大学・大学院社会学研究科・教授 (12613)	
研究 分担者	福島 裕敏 (Fukushima Hirotoshi) (40400121)	弘前大学・教育学部・教授 (11101)	